

剣士の本懐

栗山 令道

かつて、小川先生が当時青少年だった私たちを前に、こう言われたことがある。

「入っただけで恐ろしさを感じる、そういう道場にしなければならない。」

この言葉は、なんの抵抗もなく私たちに入り、自分たちなりに緊迫感のある空気を心がけてきた。見学の態度、姿勢が悪いと、子供であっても容赦なく、剣道の打ち込みと同様の気合で一喝してきたのも、この道場の真剣味、張り詰めた空気を大事に思えばこそその事であつたらう。

しかし、あらためて考えてみる。それは何故の「恐ろしさ」か？ 打たれる個所には防具をまとい、打突の衝撃を和らげるよう四つ割りにした竹棒を用いての、命のやりとりや大ケガとは無縁の打ち合いに、「恐ろしさ」はあるか？ しかも、蹲踞して立ち上がると同時に間を詰め、交刃の間で細かく軽く速い技を、長い竹刀で交わし合う世間の一般的な剣道に、当人同士、あるいはその光景を目にする部外者が感じるのは、「恐ろしさ」であろうか？

むしろ、その感覚は遠のいていると言った方が当たっているし、やむを得ない現実であると言えるかもしれない。

と言いながら、私は次に紹介する「目が醒めるような実話」に、先走る胸さわぎを押さえることができない。それは、防具をまとい、竹

刀で対峙した名人同士が見せた、正に真剣勝負そのものの試合、その始終である。

山岡鉄舟と榊原鍵吉の試合

この、日本剣道史上において有名な両者の、しかもほとんど世に伝えられてこなかったと思われる試合を語っているのは、満蒙開拓、直心影流法定之型で知られる加藤完治先生（小川忠太郎先生の師）である。実際にその一部始終を見たのは、加藤先生ご自身ではなく、加藤先生が儒学、歴史の師として心服しておられた伊佐早謙先生であった。その伊佐早先生が直接加藤先生に話した内容を加藤先生がまとめたものが『加藤完治全集』第三巻「武道の研究」上巻（日本高等国民学校加藤完治全集刊行会事務局発行）にある。以下、加藤先生の記載を引用する。

中村敬宇先生の御使いで伊佐早先生は或る時、山岡先生の許に参上した。

ところが山岡先生のお弟子達が、今日丁度「内の先生と有名な榊原鍵吉先生との試合がある。こんな機会は二度とないから是非拝見して行ったらどうか」と言うので、「是非拝見さして戴き度い」と申し述べて道場に案内されて、片隅の方に弟子達と共に両先生の試合を拝見した。

其の時の有様は道場の周囲には山岡先生（榊原先生も？）の御弟子がずらりと列んで固唾かたずを呑んで、今や遅しと待つて居る。やがて両先生は道具をつけて出て来られたところを見ると、山岡先生は、太い、短い竹刀、榊原先生は普通の三尺八寸の竹刀をとられて、互に一礼し立ち合われた。見て居る内に両先生とも大上段に構えられたが、榊原先生のが普通の上段、山岡先生のは竹刀を

斜に冠った上段（？）とにかく両者同じでない大上段に構えて、三間位離れて互に気合をかけて呼吸をはかって居らるる。

弟子達は皆手に汗を握り、口をひきしめて、どうなる事かと見入って居る。道場内が誠に静かで、只両先生の呼吸が「フーッ」「フーッ」と聴えるのみである。何とも言えぬ荘厳、寧ろ物凄い光景。斯くしている内に十分たち十五分たつ、両先生の頭からは汗の湯気が立ちのぼる。弟子達は自分（伊佐早先生）に両先生の背中を見ると言う。見れば両先生の背中も汗だくだく。かくしているうちに相変わらず、両先生は上段に構えた切り少しも動かないで呼吸のみ「フーッ」「フーッ」と吹き合っている。

弟子共は自分（伊佐早先生）に両先生の両足を見ると言う。見ると両先生の両足からも汗がだくだく流れ出て居る。凄滄、荘厳、絶頂に達して口舌筆紙につくせぬ光景であった。斯くの如くしてかれこれ四十分もたったかと思う頃、どちらの先生から引き下がったか自分等にはわからなかったが、御互いに礼をして竹刀をおさめて静かに別れられ試合は終わった。拝見して居った弟子達には、どちらが勝ったか負けたか勿論解らぬ。恐らく引き分けというところだったろうとの評であった。

之が伊佐早先生の直話である。そして伊佐早先生は言う、一度も太刀を交えられなかったが、あんなにこわい、恐ろしい真剣味の仕合は未だかつて見たことがないと。（以下略）

この時代はまだ、素面素小手の木剣試合や稽古が行われていたようである。「鬼鉄」と恐れられていた山岡鉄舟が、小野派一刀流の達人浅利又七郎と出会い、その門人となって浅利先生に対すると、来る日も来る日も同じように、浅利先生の気迫に押されて後ずさりし、ついには入口の戸の外まで出されるや、浅利先生はピッシャリと戸を閉めて奥に入るのを常としたという有名な話があるが、これは素面素小手

の木剣稽古である。

繰り返すが、山岡先生と榊原先生の試合は「防具に竹刀」である。その点においては、一見現代剣道と変わらない。そして、宏道会の剣道に言及するなら、この試合同様に三間の遠間から始まる。竹刀も刀と同じ長さの3尺2～3寸程度。振りかぶりも、打突の精神も、流祖が真剣勝負を元に工夫、制定した形の応用として行うことを目標とする。すなわち、木刀はもちろん、竹刀を真剣として扱う真剣味の中で、己の我を「切り落とし^が」ていくという、先人が命がけで残した本来の剣道を目指す会である。

しかし、カタチは似ていても、この両先生の試合を前に、私たちの真剣味の浅さ、境涯の浅さを思い知って、言葉もない……。

剣士の本懐

世間には、このような名人の話や境涯に対して、次のように言う大先生もいる。「われわれとは別次元の話で、現実的ではない。実際の稽古の役には立たない」と。

しかし、そのような考え方で行なう剣道が、どれだけ剣士としての誇りと喜びを満たしてくれると言うのであろうか？ ほとんどの剣士が「剣道」という語を棄てたくはないであろう。中には「道」がピンと来ない人も居るであろうが、それでも「剣」の一字だけは、容易に棄て難いはずである。それは日本人に流れる「血」と言ってもいい。

時代が変わり、形は変わっても、武士道の精神は「サムライ」「剣士」「大和魂」として、今なお日本人の心の拠り



著者の演武（宏道会剣道場にて）

どころとして、現代に息づいている。その日本人の一人として、剣士として、私たちはできるだけ多くの剣友とともに「剣士の本懐」を味わう道を歩みたい。それは、とりもなおさず、「剣」と人間形成の真剣味が一つになった「道」である。

宏道会の剣道は、段や試合を目的としていないため、年齢や経験、運動神経などは問われない。体力に無理がある年配者なら、素振りや形稽古に数息観、あるいは人間禅の坐禅を中心にするのも一つの方法で、門戸は広く開かれているのである。

最近の傾向として、未経験の主婦、中年の男性の入会者が目立つが、その一人、玉木友季子（道号 / 妙香）さんが、本誌の前号（27号）で宏道会の体験を印象深い表現で次のように綴っている。

竹刀が「真剣」だと想像してみた。すると、もう相手と向き合うと思うだけで恐ろしいことが分かる。まず、私の頭に浮かんだことは、走って逃げることだった。

竹刀を「真剣」とみなすことで、はっきりすることがある。それは、「生死」を意識するようになるということである。私が「走って逃げたい」と思ったのも、まさに死を恐れたからであって、その瞬間、本能的に生きたいと渴望したからだった。

死と向き合うことの恐ろしさを知ることは、今「生きている」ことを感じることにつながる。そのことを、私達は普段ほとんど意識しないのであるが.....。

では、「死」を意識するような絶体絶命の瞬間、人はそのことにどう向き合うのだろうか？ 竹刀稽古でそのことを想定し、実験するのが宏道会というところだった。（以下略。「逃げないという『愛』 宏道会の剣道に見つけたもの 」より）

終わりに、無刀流山岡鉄舟の高弟である香川善次郎の高弟石川竜三

先生の剣道話を以って、この稿を結びたいと思う。再び『加藤完治全集』第三巻「武道の研究」から引用する。年代がはっきりしないが、加藤完治先生の愛弟子の酒井章平先生と小川忠太郎先生とが、東京大久保にあった石川先生の寓居を訪れて教えを受けたという前置きの後に、小川先生の御質問に石川先生が答える場面から始まる。

小川先生 「石川先生が無刀流に転ぜられたる動機はどんな処からでございますか？」

石川先生 「私は若い時から剣道が好きで、今の長い竹刀で修行して居りました。処が27、8歳の頃長い竹刀を使っている中にだんだん斯の様な剣道をやっていることに不安を抱き始めました。

不安とは何かと云うと『真剣勝負の場合にこんな竹刀で稽古をやっていて役に立つものであろうか』と。

その時分、国の無刀流の友人が時折訪ねてくれたので立合ってみると、自分が相手を打った気がしない。反対にたまに友人に打たれるのは自分の骨身にこたえて本当に切られた様な気がする。丁度折も折、香川善治郎先生が金沢に来られたのですぐ入門して教えを請うた。(中略)

近頃は娯楽とか自由とか申して骨を折ることを惜しみますから自分の力にはなりません。そして骨を折らないで名と利に走る。物をあやまるは凡て我慾我念。之を捨てれば求めずして光明は現われる。苦しい中にも之をつかめば安心がある。内に安心する所が無いから外物に誘われる。名聞利益が来れば泰然自若とすることが出来ずして迷わされる。大死一番しなければ我慾我見は捨てられぬものです。剣術は死ぬ稽古をするのです。

処が近頃の剣術は自分が生きる為の稽古のようです。どうも理屈を言っではいけません、今の剣術の墮落はひどいものです。

なんでも早技で一寸当たれば勝負あったりとするのですから当たることに夢中になって、肝心要の慾を捨てる処か己をあざむいても勝ちたい、打ちたいと云う有様です。今の勝負は勝負になりませぬ。名前の上に 印をつけられたから勝ったの負けたのと思っただけでござす。

相手に仕掛けられて、心が動いたら打たれなくても負です。『参った』と云って反省する。昔の試合はあんなものでありません。」
(以下略)

合掌



直心影流の形稽古をされる
小川先生(右)

著者プロフィール



栗山令道(本名/敏司)

昭和27年、千葉県市川市生まれ。法政大学法学部卒業。昭和38年、人間禅教団附属宏道会入会。第三代会長を経て、現在妙位(教士)並びに顧問。昭和54年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅輔教師。

剣、禅の道を生きて（一）

武藤 仁剣

本日は「私を禅に導いたもの」、「剣道との縁」、「剣の理法」、そして小川忠太郎先生の書かれた『百回稽古』について話をさせていただきます。

一 私を禅に導いたもの

（１）母の読経

私は昭和17年に東京の駒込で生まれました。そして昭和20年の1月に父が亡くなり、2月に母方の田舎、筑波山の山懐に抱かれた集落に疎開いたしました。皆さんはほとんどご存じないと思いますが、東京は昭和20年3月に大空襲にあっております。本所・深川を中心に下町が壊滅的な被害を受けております。私の住んでいた駒込も多大な被害を受けたようであります。もし父がもう一ヵ月生きながらえていたら、本日のこの場面は実現しなかったと思います。まさに奇しき縁であります。

そして、母が疎開先で8畳一間と6畳の土間の小さな藁葺き屋根の家を建てました。勿論天井板など貼ってありませんので、梁と藁葺き屋根の裏側がまともに見えるような家でした。夏になるとこの梁の上を青大将が這いずりまわりまして、時には吊ってある蚊帳の上にドサリと落ちてくることもありました。このすさまじい環境の藁葺き屋根の小さな家で、幼い男の子供3人と母の赤貧洗うがごとき生活が始まるわけですが、当時は社会全体が貧しい時代でしたので、とりわけ我が家だけが貧しいとは感じませんでした。子供で無邪気だったことも

あったと思います。そして、この藁葺き屋根の家で毎朝母が読経をしておりました。子供たちは母の読経で目を覚ますという毎日でした。母は真言、般若心経、そしていくつかの真言宗の諷誦文などを唱えておりました。ですから小学生の頃には正確ではなかったと思いますが、般若心経はほとんど諳^{そらん}じていました。長じてから、大智慧を説くという般若心経の難解な経文の意味を理解しようとして、般若心経の解説書に目を通すようにもなりました。また、その延長線上で西洋哲学書にもひと通り目を通しました。古代ギリシャ哲学はまだしも、中世以降の西洋哲学は難解で肌に合わなかったと見えて、現在ではほとんど記憶に残っておりません。難解であったという記憶だけが残っています。いずれにしても、この母の毎朝の読経が私の宗教心の原点となっております。

(2) 父の影響

私の父は真言宗醍醐派^{だいが}の僧で、自らの意志で出家した一代限りの修験僧でした。醍醐派は京都の山科にある醍醐寺三宝院が本山でして、豊臣秀吉が庇護^{ひご}した寺です。そして、秀吉の「醍醐の花見」でも有名な寺であります。醍醐派は真言宗の中では少数派ですが、真言密教では特に厳しい修行をする一派のようであります。小さい時から母から、父の修験者としての修行の様子や人柄などを聴き、大乘仏教への関心を強くしました。そして自分も一生行じられるもの、修行と呼べるものを持ちたいという志を抱いたことを覚えております。中学1年生の時に剣道に出会い、33歳にして禅に出会い、現在までこれを持続できたのも、この顔も覚えていない父の影響が伏線となっていると考えております。

(3) 諸先輩からの薫陶

剣道関係の諸先輩、とりわけ警視庁の剣道の先生方には大変お世話

になりました。昭和40年前後だと思いますが、警視庁の剣道助教の先生方が大森曹玄老師に参禅することがありました。これは恐らく小川先生の影響だろうと思います。そして、ある助教の先生から大森曹玄老師の『剣と禅』という本を紹介されました。この本が禅書と呼べるかどうか分かりませんが、私にとっては初めての剣と禅に関わる本でした。この本で名人・上手と呼ばれる先人の剣と禅との関わりを学びました。そして、大乘仏教のひとつである禅というものをしっかりと意識することになりました。

(4) 人生への疑問

私は都立の実業高校を卒業した後、富士製鉄、後に八幡製鉄と合併して新日鉄になる会社ですが、この会社に就職いたしました。当時、富士製鉄は相模原市の淵野辺に中央研究所を建設中で、私はその要員として2年ほどお世話になりました。しかし進学の夢止み難く、苦学を覚悟で富士製鉄を辞め、何とか中央大学理工学部物理学科に潜り込みました。中大を卒業して再就職し、家庭を持ち子供も生まれ、経済的に恵まれなかった学生時代までに比べ、何とか人並みの生活ができるようになりました。その時に「俺の人生はこれでいいのかな？」という人生へのささやかな疑問を抱きました。しかし、全く深刻なものではありませんでした。当然というか、このような問題の解決方法は大乘仏教しかないことは分っていましたし、また、父のいた大乘仏教の世界を覗いてみるのも悪くないと考えました。この二つがきっかけとなりまして、道場の内容については全く知らないまま、この道場の門を叩きました。結婚の前後に松戸に家を建てており、この道場の前を何度か通っておりまして、ここに禅道場があることは分っておりまして。

初めて道場へ来た時のことですが、昭和50年の春、まだ肌寒い頃でした。ポンコツ車に女房と生まれて間もない長男を乗せて剣道場前に

乗りつけました。そして、いつの間にか長身の妙峰庵老師が車の前にヌッと立っておられ、「何しに来た？」と言われましたので、「入門したいと思います」と申し上げましたところ、老師は「まあ、そう言わんで坐ってみろや」というようなやりとりがあり、それから毎日曜日の静坐会に参加するようになりました。そしてその夏の学生修禅会にたまたま3名の新到者が揃っているのです、久しぶりの仮入門を許すということになりまして、3名と一緒に老師の室内に入り初関を頂きました。その時の「同期の桜」が橋本溪声居士、現在大阪にいる遠藤涼峰居士、それに私の3名であります。

このような縁で禅に手を染めて30年以上経過したわけですが、日々を振り返ってみますと、まさに「日暮れて道遠し」の感を強くしております。毎日行じている数息観・読経の際に微細な念慮が浮かびまなりません。息はスラスラと数えられますが、微細な念慮が浮かび数息観三昧になれません。経文はスラスラと唱えられますが、微細な念慮が浮かび読経三昧になれません。そして極めつけが、読経の最後に唱える『四弘誓願文』です。『四弘誓願文』で目指している誓願と自分の境涯との差に、^{じくじ}忸怩たる思いをしているというのが現在の偽らざる心境であります。

二 剣道との縁

(1) 剣道を始める

当時は現在のようにサッカーだとか野球だとか選択肢は多くありませんでした。中学1年の時に、たまたま目の前に剣道が出てきたので取り付いたということでありませぬ。高校、大学、社会人、そして現在まで、主として江東区剣道連盟で稽古をしております。

(2) 警視庁武道館での朝稽古

中大を卒業して再就職して社会人になってから、警視庁武道館で稽

古をさせていただきました。警視庁武道館は剣道と柔道の助教を養成する場で、また警視庁の剣道と柔道の総本山でもあります。小川先生は、ここの剣道指導室の主席師範をされていたわけです。現在は新木場に移っておりますが、当時は小石川の中大理工学部の奥にありました。毎年何名かの選抜された生徒が、武道専科、武専と呼ばれていましたが、ここで助教になるために養成されるわけです。中大在学中には警視庁の武道館であることは全く知らず、毎日熱心に稽古をしている道場があるなあと眺めておりました。卒業後、ある助教の先生に、「私の通っていた大学の隣に、毎日熱心に稽古している道場がありましたよ」と話しましたところ、「武藤君、それはうちの武道館だよ」というようなやりとりがあり、それが縁でその助教の先生に頼み込み、警視庁武道館の朝稽古に参加させていただきました。

この警視庁武道館での思い出は、まず寒中の朝稽古です。小石川の高台に建てられた3階建ての一番上の3階が剣道場でした。そして東西と南の三方の大きな掃き出し窓を開け放ち、寒風を十分に取り入れて寒気凛冽^{りんれつ}たる環境で稽古をするわけですが、寒いとか冷たいという感覚はなくなります。足は痛いという感じになりますが、それも稽古を始めればどっかに飛んでいってしまいます。

次が水のシャワーです。このシャワーは何故かお湯が出ません（早朝で時間外のためか？）。下っ腹に力を入れてシャワーを浴びるわけですが、着替えて小石川の坂を下る頃には体がポカポカと温まってくるんですね。警視庁の先生から温かい大風呂に入ることを勧められましたが、外部から稽古に参加させていただいている遠慮もあり一度だけ使わせていただき、後はずっと水のシャワーで稽古の後の汗を流しました。

そして朝粥。何度か声をかけていただきまして、図々しく指導室に上がりこみ、朝粥をご馳走になりました。梅干1個に沢庵二切れ。三分粥^すぐらいだったと思いますが、稽古の後の空きっ腹に大変おいしく

いただき、懐かしい思い出であります。

当時、小川先生も時に顔を出しておられました。当時私は全く小川先生は存じ上げませんでした。ただ、警視庁の先生方の丁寧な対応から高名な先生であろうことは感じておりました。

(3) 宏道会での稽古

この禅道場入門してすぐに入会したわけではなく、半年ぐらい経ってからだったと思います。当初は小川先生が指導されていることも全く知りませんでした。小川先生からは小野派一刀流、直心影流、それと稽古を指導していただきました。小川先生との稽古は壁にぶち当たっているような感じで、特に目の前にある剣先がなんとも言えない特別な感じで、どう攻めていいかわからない、取り付く島がないという感じでした。今から思えば、まさに難透難解^げにぶつかっている感じでした。私が稽古をお願いした頃には既に膝を悪くされており、さすがに先生から打って出られることはありませんでしたが、全く崩れない。無理して打てば切り落とされ、あるいはパカーッと小手を打たれました。

(4) 大阪在勤中の稽古

大阪に転勤するに当たり、小川先生にその旨を申し上げ、どなたか先生を紹介していただくようお願いしたわけですが、「それでは長井君と西君のところへ行けばいい」と言われるだけで、住所も電話番号も教えていただけませんでした。まあ、小川先生がおっしゃるんだから関西地区でも高名な先生だろうと思い、大阪へ行きました。ちなみに、長井先生も西先生も小川先生の国土舘時代の教え子だったわけです。大阪に行ってから何とか両先生を探し当てましたが、私が大阪に行くことを小川先生から両先生にご連絡くださっていたようで、大阪では両先生に大変可愛がっていただきました。長井長生先生は八段範



長井範士と一刀流刃引きの演武(大阪にて)

士、既に亡くなられました。京都の武徳殿で先生と小野派一刀流の刃引きの演武をした懐かしい思い出が残っております。西善延先生は九段範士、かなりご高齢のはずなので現在も稽古をされているのかどうか分かりません。

大阪では3箇所ほどの道場で稽古をしました。まず、修道館での朝稽古。大阪城の大手門を入れてすぐ右側に武道場がありまして、剣道と柔道の道場となっています。朝7時から8時まで、遠くは和歌山、奈良、兵庫から高段者が集まり、熱心に稽古をしておりました。私も西宮の社宅から車で朝稽古に通いました。稽古の後、汗を流すためにシャワーを浴びるわけですが、全員が一斉に使うもんですからお湯なんか出やしません、これも水のシャワーです。そして東淀川区の会社の近くに借りた駐車場に車を入れて出勤するわけです。時々、仕事の関係で外せぬ夜のお付き合いがあって、車で帰れず、翌日の朝稽古を休まなければならないこともありました。

それから長生館、これは長井先生の道場で東住吉区にありました。長井先生は小野十生先生から一刀流の指導を受け、関西地区ではただ一人の一刀流の指導者でした。私は宏道会では完全に一刀流を覚えて

おりませんでしたので、長井先生の下でひと通り一刀流の稽古をしました。長井先生は口も達者、手も達者な方で、書も絵もなかなかのものとお見受けしました。

そして堺の刑務所。刑務所の職員を鍛錬する武道場が刑務所の敷地内にあり、毎日曜日に関西地区の高段者が集まって稽古をしておりました。参加者はほとんど修道館の朝稽古のメンバーでした。帰りに時々、長井先生や西先生と昼食をとったりしておりました。

(5) 野間道場での朝稽古

転勤で東京に戻り、野間道場の朝稽古に参加しました。野間道場は、講談社創立者の野間清治氏が社員と子弟の教育の場として造った道場で、後に持田盛二先生を師範に迎え、戦前戦後を通じて全国的に大変有名な道場であります。地方から、一度でいいから野間道場で稽古をしたいと顔を出す剣士もおられます。残念ながら、私は3年ほど前に高血圧のためドクターストップがかかり、永年続けた朝稽古に終止符を打ちました。現在はもっぱら夜を中心に稽古を続けております。

(つづく)

著者プロフィール



武藤仁剣（本名 / 敬仁）

昭和17年生まれ。中央大学理工学部卒業。元(株)リョーサン勤務。昭和50年、人間禅佐瀬孤唱老師に入門。現在、同教団布教師。

驚きに満ちた場所

松本 佳代子

私が宏道会と出会ったのは、今から4年前になります。長男が1年生になった時のことです。隣に住んでいた男の子が剣道をやっていたので、長男を同じ剣道に通わせたいと思い、子供達と共に宏道会を訪ねました。

最初に宏道会の剣道を見たときの、懐かしいような恐ろしいような驚きは今でも忘れません。そんな驚きに満ちた場所に、4年間も惹かれて通ったのは何だったのかと改めて考えてみると、やはり真剣で真直ぐな思いに心を打たれたからだと思います。

当時は長男以外の3人の子供がまだ小さく、長男にも十分に手を掛けてやれていないという負い目の様な気持ちもあり、また復帰した仕事の方も大変で、今思えばそんな状況をどうにかしたいという気持ちが強かったのかもかもしれません。

そんな時に、当時は少ないながらも一生懸命に、周囲に惑わされずに真摯な稽古をただ続けている、自分には出来ないと思っていたことをやっている人達がいる、それが剣道を始めようと思ったきっかけなのかもしれません。

初めに前宏道会会長の佐瀬先生から「一度始めたからには黙って10年ですよ」と言われました。先生方には「宏道会の剣道は、試合の勝ち負け、段を取る事が目的で



家族とともに（宏道会剣道場にて）

はない。自分の精一杯の力を出すことが大切だ。器用、不器用、経験のあるなしは関係ない」とよく言われます。

先生方は、大人や子供を区別することなく、真剣に鍛えてくださいます。正直言ってつらいなと思う時もあるのですが、宏道会の稽古の魅力は一度参加していただければ、分かっていると思います。稽古の後の爽快感は、他では味わえないものがあります。

宏道会の教えには、人として大切な言葉がたくさんありました。稽古のたびに言う五戒「・嘘をついてはいけない ・怠けてはいけない ・やりっ放しにしてはいけない ・我儘^{わがまま}してはいけない ・人に迷惑をかけてはいけない」は、実行することは難しいですが、子供や大人にも通じる大切なことだと思います。

今では4人の子供達と共に剣道場に通っています。宏道会の剣道を通して子供達も成長してきました。子供達にとって、家では口うるさいお母さんなのでしょうが、剣道場では先生に教えていただく生徒として、同じつらさを共有する仲間という感じがします。稽古の中で子供が壁にぶつかる、怖いと思う自分に負けそうになる、でも自分に負けないで向かっていく、そんな姿を見ていると、自分も頑張ろうと思えてきます。逃げずに一生懸命に取り組む、簡単そうに見えてなかなかできないことだと思います。

最近女性の方を初め、大人の方々の参加も増えてきました。他の方々の稽古を見て励まされることも多いです。

これからも、宏道会で自分や子供がどんな稽古を続けていけるか、どのように成長していくのか、楽しみにしながら剣道が続けていきたいと思います。

著者プロフィール

松本佳代子

昭和44年生まれ。病院理学療法士。平成16年人間禅附属宏道会入会。現在、修習級。